

氏 名 山本 真鳥

学位(専攻分野) 博士(文学)

学位記番号 総研大乙第246号

学位授与の日付 平成29年3月24日

学位授与の要件 学位規則第6条第2項該当

学位論文題目 グローバル化する互酬性
—サモア世界の儀礼財の循環と首長制—

論文審査委員 主 査 教授 岸上 伸啓
准教授 丹羽 典生
准教授 林 勲男
教授 柄木田 康之 宇都宮大学
教授 遠藤 央 京都文教大学

論文の要旨

Summary (Abstract) of doctoral thesis contents

論文題目： グローバル化する互酬性－サモア世界の儀礼財の循環と首長制－

本論文の主たる議論は、ファイン・マットという儀礼財が粗悪化、復興という運命をたどりながら、サモア社会の儀礼交換に用いられ続けてきたのであるが、その儀礼財を中心に、あわせてサモアという首長制に基づく社会の変化を描くことに集中している。とりわけ、筆者が 1978 年に調査に入ってから以来の変化は、断続的な調査により目の当たりにすることができた。サモア社会のとりわけ西サモア（のちにはサモア独立国）は戦後に海外移民が急増し、その送金が社会のあり方を大きく変えたが、儀礼財は首長称号名と共に、その反対給付として海外に流れた。

本来あったサモアの首長制は、ポリネシアに一般的な再分配によってもっぱら支えられる首長制ではなく、その経済基盤はやや脆弱であり、競覇的性格をもっていた。そして、サモア社会ではそれを補うべく姻族・親族間互酬性が重要性を帯びていた。もちろん再分配も存在していた可能性はあるが、少なくとも首長称号名の格付がとりわけ 20 世紀になってから平準化すると共に、互酬的贈与交換によって支えられる儀礼交換を行って、首長称号名の名声を維持する傾向が高まったとみられる。

その結果として盛んに行われる儀礼交換は、親族間の交換として、ある種の構造をもっていた。それは、トガ（女財）とオロア（男財）の財のカテゴリー分けであり、婚姻に際して行われる花嫁方と花婿方との間の交換では前者からトガ財が、後者からはオロア財が贈られ、互いに財を取り交わす形となっていたが、儀礼交換を執り行う当事者アイガに対する姻族たちは、かつて縁組を行ったときの男方／女方の別に則して贈る財を調整していた。儀礼交換はこのように、互いに姻族となる親族集団の連帯のネットワークを広げる意味をもっていた。財のカテゴリーは、この社会に欧米から新しい財が入ってくるとそれを柔軟に取り込んできていたが、現金がそこに入ってくると、儀礼交換は大きく変化した。この男方と女方の財の区別は、移民の増加に伴い、移民は男財を、本国人は女財を贈るといえるように変化していったのである。

この社会は現代の南太平洋に位置し、さしたる資源も持たない極小国家として、戦後移民を環太平洋諸国に送り込み、そうやって移民の送金で何とか生き延びてきたのであるが、その移民の送金は本国社会の儀礼交換や首長制に大きなインパクトをもっていた。移民の送金は、この社会の古くからの規範としてある一般的互酬性の論理で、すなわち「持てる者が持たざる者と自分のものを分け合う」という理念の下に行われた。移民は持てる者なので、持っているものを本国の親族と分け合うことは当然であった。一方で本国で持っていて移民が持っていないもの、称号名とファイン・マットは移民社会にどんどん流出したのである。また移民から現金を引き出すために称号名やファイン・マットを移民に贈ることが広く行われた。

称号名とファイン・マットはそれによって大きな変更を被ることになった。儀礼交換に現金が多用されるようになり、在地の親族だけで儀礼を維持することが難しくなってきた

(別紙様式 2)
(Separate Form 2)

が、称号名を分割することにより、在地マタイとして分業によって親族集団の切り盛りをするという体制を産むこととなった。称号名の分割は止まらず、今や増殖した称号名は、実質的に家長の役割を果たしていない若者も入手するようになった。ファイン・マットは、数を増やす必要上から粗悪化に陥った。送金の反対給付として海外向けに贈る必要があったと共に、移民から現金を引き出す目的での贈与も行われた。両方ともそうやって増殖していき、希少価値を減じていったのである。

そのような移民コミュニティでのファイン・マットの交換はサモア人としてのアイデンティティに関わるものとなった。ファイン・マットのやりとりが行われる儀礼交換——そこではとりもなおさず現金も飛び交うのだが——に参加すること、故郷の儀礼交換に出席したり、送金したりすることは、大いにアイデンティティに関わる事項であり、これに参加しない人は、コミュニティの周辺や圏外も位置するものとみなされる。もちろん、自ら逃げだそうとする人々もいる。しかし、粗悪品化も大きな要因であるが、大量のファイン・マットが移民社会も滞留するようになってしまった。

本国人と移民とがある種共通の倫理観や文化的価値観をもち、広く交流やコミュニケーションが行われている全体をあわせ、筆者は「サモア世界」と呼ぶようになった。サモア世界はグローバル化にもともなって出現している。この空間が全く均質であるとは考えていないが、何らかの共通価値をもっており、それに突き動かされたり、反発したりする。送金という形でサモア世界の中心は支えられているが、その送金は恐らく、中心部分の文化的伝統的と深く関わっている。もしも、移民がこぞってそうした価値にそっぽを向いたら、本国社会は没落してしまうだろう。今のところそのような気配はないが、未来永劫いつまでも本国のヘゲモニーが続くとも思われない。

おそらく、ファイン・マット復興運動は、そうした本国ヘゲモニーを維持する力をもつことと関係している。そのような精密なファイン・マットの製作は、サモア外に住む人々には当面は縁がないことだろう。そのようなファイン・マットを賞賛し、またお金さえあれば、購入する、と公言することはあるだろうけれども。ファイン・マット復興運動によって、しばらくは本国社会のヘゲモニーは続くであろう。

これらのファイン・マットの商品化の動きを見て、ファイン・マットが市場経済の中に入ってきたので、この社会の市場経済化もどんどん進行していると考え人は多いに違いない。ただ、われわれが留意しなくてはならないのは、ファイン・マットが商品化しているといっても、なぜ大金を出してまでファイン・マットを入手したいという人がいるかということである。それは儀礼交換に欠かさないからである。つまり、ファイン・マットは商品としての顔も儀礼財としての顔も合わせ持っているということであり、入手経路と利用経路はコンテクストにより異なるということになる。それらの新しい上質ファイン・マットは、多くの場合退蔵されて、なかなか人目に触れることが少ない。しかし、それらはここぞという場面、親の葬式や娘の結婚式などのときに衣装ケースの中やベッドの下から取り出されて、陽の目を見、贈与されるのである。

クラ交換が多くの変容を受けつつも継続しているように、ファイン・マットとサモアの贈与交換は簡単には廃れそうもないが、それには互酬性の原理が働いているからである。

(別紙様式 3)
(Separate Form 3)

博士論文審査結果の要旨

Summary of the results of the doctoral thesis screening

論文題目： グローバル化する互酬性ーサモア世界の儀礼財の循環と首長制ー

本論文は、申請者が 1970 年代から現在に至るまで、西サモア（1997 年以降サモア独立国と呼ばれるが、以下ではこの表記で統一）を中心に、アメリカ領サモアおよびアメリカ合衆国やニュージーランドなどのサモア人が移住先で形成したコミュニティにおいて実施した現地調査に基づいている。西サモア本国と移住先からなるネットワーク社会を「サモア世界」として、その持続と変容を、儀礼交換の財であるファイン・マットに着目して描き出した民族誌が本研究である。なお、ファイン・マットとは、パンダナスを斜め平織りに手で編んだ編み物である。

本論文は 8 章からなる。序論である第 1 章では、研究目的を提示した後、儀礼交換を研究するための贈与や互酬性などの概念およびファイン・マットに関する先行研究を整理・検討する。

第 2 章では、本論の対象である伝統的サモア社会の社会組織の概観を描き出している。特に、西サモアの称号制度とそれに基づく分権的な地縁組織の特徴を、ポリネシアにおける独自のメカニズムに基づく政体として析出する。

第 3 章では、西サモアにおける結婚式や葬儀などにおける親族間での儀礼交換の基本構造を描き出す。

第 4 章では、西サモアの欧米社会との接触、特に市場経済の浸透により、現金や塩漬肉の樽詰などの新たな財が儀礼交換に取り入れられることで、土着の儀礼交換が変容してきたことを記述・分析する。そしてその一方で、競争的な首長システムの存在が、姻族間のネットワークを維持させる効果を保ち続けていることを明らかにしている。

第 2 章から第 4 章までは西サモアに関する研究であるのに対し、続く第 5 章ではアメリカ合衆国の西海岸やハワイ及びニュージーランドなどの環太平洋先進諸国に移住したサモア人のコミュニティの状況を、西サモア本国との関係から記述する。移民コミュニティから西サモア本国へは儀礼交換の実施に必要な現金のフローがあり、それに対し、西サモア本国から移民コミュニティへは移民先での儀礼交換に不可欠なファイン・マットや、サモア人が保持することを望む首長称号等がもたらされている。申請者は、この状況に基づき、サモア世界では国境を越えて「持てる者が持たざる者と自分のものを分け合う」という一般的互酬性の世界が広がっていると指摘する。

第 6 章では、移民と西サモア本国との関係を西サモアの称号制度の変容という点から描き出す。特に農村地域から国内の都市部や海外への人口移動が首長制とりわけ称号制度の継承に及ぼす影響について検討する。そして村の過疎化や村に居住しない首長称号保持者の増加、称号分割（同一の称号を複数の人が保持すること）が急増していることを記述・分析している。不在者に称号を授与することによって、称号制度を維持するのに必要な現金が、移民先から西サモア本国の首都へ、さらには首都から村へと流れ込むことを報告する。そしてこのことが首長制の崩壊を招く可能性がある一方、同制度を継続させるためのグローバル化への適応でもあると申請者は主張している。

(別紙様式 3)
(Separate Form 3)

第7章では、1990年代のNGOによるファイン・マットの復興運動、及びその後に実施された西サモア政府によるファイン・マットに対する文化経済政策を紹介したうえで、それらが社会に及ぼした影響について論じる。1990年代以降、高品質のファイン・マットや大型ファイン・マットが儀礼交換で使用されるようになり、サモア世界では依然として（これまでに以上に）貴重な交換財であり続けている。そしてファイン・マットに象徴される財のやり取りの基盤には、一般的互酬性の理念が存在していることを指摘する。

第8章では、論文全体を要約するとともに、結論を述べる。申請者は一般的互酬性の原理が働き続けているので、サモア世界ではファイン・マットの儀礼交換が継続していると主張する。そのため、移民コミュニティではサモア人としてのアイデンティティが、西サモア本国においては称号に基づく首長制度が当面は受け継がれるであろうと結論づけている。

サモア世界に関する民族誌である本論文には、高く評価すべき点はいくつかある。

第1に、本論文は1箇所での集約的なフィールド調査に基づく傾向の強い従来の民族誌とは異なり、西サモア本国と移民コミュニティという複数の場を往還する複合的なネットワークを分析に組み込みながらサモア世界を描き出した点が特筆に価する。昨今はやりのマルチサイト民族誌は表層的な研究になりがちであるが、本論文はサモア世界に関する広く深い知見に基づくきわめて優れた人類学的な定性的研究となっている。このため、グローバル化時代における人類学的民族誌のひとつのあり方を示していると考えられる。

第2に、そうした調査方法によって、グローバル化が急速に進むサモア世界の状況が、30年以上にわたる長期調査による一次資料に基づいて、厚みをもって記述されている点に本論文の独自性がある。特に、儀礼交換用の現金が移民コミュニティから西サモア本国に流れる一方、ファイン・マットや首長の称号が逆の方向に反対給付されている現象が発生していること、併せて、西サモア本国では儀礼交換と首長制度が維持されつつも、大量生産によるファイン・マットの質の低下や不在称号保持者の増加が起こっていることを詳細に報告し、その背後にあるメカニズムを明らかにした点は高く評価できる。

第3に、上記で指摘したように、時間的な厚みを持ちつつ、ローカルからグローバルまでをカバーする儀礼交換と首長制度に関するオセアニア地域の民族誌研究は、世界的に見ても類例が少ない。ことにファイン・マットという古典的で、一見ありふれた題材にみえるが、これまで十分考察されることのなかった対象に着目して、着実な研究成果に結実させている独創性と力量は高く評価できる。従って、本論文はオセアニア人類学の今後の発展に大きく貢献すると考える。

以上のように本論文はきわめて優れた研究成果であるが、問題がまったくないわけではない。申請者はファイン・マットなどの交換財の儀礼的なやり取りを互酬性という人類学概念に基づいて分析を進めているが、サモア世界における一般的互酬性の理念を前提としている点や互酬性のメカニズムに関する分析に若干の不十分さが見うけられる。また、サモア人のファイン・マットおよび儀礼交換、首長称号などへの執着について、社会内の多様性を考慮に入れて解明することや他のオセアニア社会との比較を行なうことによって、より説得力のある研究が展開できると考える。ただし、これらの点は本論文の独創性を貶めるものではなく、むしろ今後の課題として研究されるべきであると考えられる。

以上を総合的に評価して、本審査委員会では全員一致で博士の学位を授与するにふさわしい論文であると判断した。